

テーマ別パスファインダー



西洋とアメリカを問い直す



✦ パスファインダーとは？

Pathfinder（パスファインダー）とは、探検者／草分け／開拓者の意。レポート作成や論文作成で、何をすればいいのか、どこへ行けばいいのかわからない！そんな人のための助けになるように作成した、学問の「道しるべ」です。

作成日：2017年1月14日

大阪大学 外国学図書館 | 箕面キャンパス |
ラーニングコモンズ るくす | LSチーム

I. イントロダクション

■ 西洋とアメリカを問い直すとは？

昨今グローバリゼーションが声高に叫ばれ、「世界の西洋化」が進展してきました。この「世界の西洋化」を主導してきたのは、「西洋」の理念が具現化された国アメリカです。現代の諸問題を考察するためには、「西洋」や「アメリカ」を避けて通ることはできません。では、「西洋」や「アメリカ」はどのような来歴と特徴を持っているのでしょうか。このるくばすでは、「世界の西洋化」の理解と問題点克服に役立つ著作を紹介します。

関係分野：政治学、経済学、哲学、ポストコロニアル研究

II. 「西洋」の古典

ここでは、「西洋」に関する最重要のテキストである聖書と、現代世界を考えるための2つのキーワード「経済」と「自由」についての古典的な著作を紹介します。

■ ①『旧約聖書』・②『新約聖書』 岩波書店

「西洋」を理解するために必読。岩波版は注釈が詳しく、同じページにあるので便利。

【①外国図-4階開架 193.1||40 ②外国図-4階開架 193.5||109】

■ 堂目卓生（2008）『アダム・スミス『道徳感情論』と『国富論』の世界』中央公論新社

経済学の始祖であるアダム・スミスの主著は『道徳感情論』と『国富論』の2つです。しかし、どちらも長大な著作であるため、通読は困難です。本書はスミスの主著2冊のエッセンスを解説したもので、入門に最適です。【総合図-A棟3階 文庫・新書 089||CS||1936】

■ ミル, ジョン・スチュアート（2012）『自由論』齊藤悦則訳 光文社

現代では「経済」と「自由」はほとんどの場合結び付けられて出てくる言葉となっています。「自由主義経済」という言葉はその最たるものです。自由主義という言葉の根底にあるのは、「他者危害の原則」です。これは、他人に危害を加えない限り、個人の自由を最大限に保証すべきだという考え方です。「他者被害の原則」は、この『自由論』で初めて論じられました。光文社の新訳版は、難解な原書の英語を噛み砕いて平易な日本語にしています。直訳調の岩波文庫版よりも読みやすいのでお勧めです。

【理工学図-東館2F 文庫新書 K||KBN||MIL】

III. 「西洋」への批判

ここでは、「西洋」が抱える問題点を、植民地主義、新自由主義、合理性の偏重、産業社会における無賃労働という4つの切り口からそれぞれ考察する著作を紹介します。

■ 藤永茂（2006）『『闇の奥』の奥：コンラッド・植民地主義・アフリカの重荷』三交社

近代における「西洋」の発展は、植民地からの富の収奪によって支えられてきました。その大きな犠牲となったのが、アフリカです。英文学の古典とされてきた小説『闇の奥』の同時代のアフリカとヨーロッパでの出来事を考察しつつ、この小説、さらには西洋の植民地主義の欺瞞を解き明かした労作です。

【外国図-4階開架 249||65】

■ **Dufour, Dany-Robert. (2008) “The art of shrinking heads : on the new servitude of the liberated in the age of total capitalism” translated by David Macey, Polity P**

日本ではほとんど知られていませんが、現代を考えるにあたり極めて重要な思索を展開しているフランスの哲学者、ダニー＝ロベール・デュフルの著作の英訳です。カントやフロイトの理論にみられるように、近代における人間像は「理性」や「無意識」といった超越的なものを前提とし、象徴に価値を見出していました。しかし、現代のグローバル資本主義を推進する新自由主義は市場における商品の価値を強調し、超越的なものを破壊しています。もはや人間は、自分が何者であるかを省みることはありません。この「頭を切り詰める技法」こそ、新自由主義の最大の特徴です。「頭を切り詰める技法」が生み出した新しい人間は、ただ財の消費を繰り返し享楽に溺れる存在であることを本書は暴きます。【外国図-4 階開架 331.1||48】

■ **デュピュイ, ジャン＝ピエール (2014)『聖なるものの刻印：科学的合理性はなぜ盲目なのか』西谷修, 森元庸介, 渡名喜庸哲訳 以文社**

以下は訳者の西谷修がブログに書いたコメントです。簡にして要を得た評言ですので引用します。

この本は、あらゆるものが単位化され数値化されて、その合理的計算がすべてを解決するといった、科学技術や経済学に共通の「合理性」が、じつは盲目の信仰に支えられているという事態を説明し、人間の社会とはどのようにできていて、それが存続するとはどういうことなのかを、もう一度考えさせるたぐいのものなのだ。それが喫緊の課題であるのは、科学技術にせよ経済事象にせよ政治的事象(たとえば選挙)にせよ、そこに埋め込まれた盲目性が人間の世界を破局に追いつめていることが、いまや明らかだからだ。そんな袋小路のなかで、個々の事象がそれぞれの地域的偏差を伴いながら起こっている。

【外国図-4 階開架 135||210】

■ **イリイチ, イヴァン (1990)『シャドウ・ワーク：生活のあり方を問う』玉野井芳郎, 栗原彬訳 岩波書店**

題名でもある「シャドウ・ワーク」とは、生活に不可欠でありながら賃金が支払われない労働のことを指します。具体的には、家事労働や通勤などのことです。これら経済活動の「影」がいかに生み出されたかを考察し、近代産業社会を鋭く批判する書です。【外国図-3 階小型本 081||145||10】

IV. アメリカを問い直す

ここでは、「西洋」の理念を具現化した国アメリカが抱える問題点を、建国時にまでさかのぼって考察する著作3冊を紹介します。

■ **藤永茂 (2010)『アメリカン・ドリームという悪夢：建国神話の偽善と二つの原罪』三交社**

「チェンジ」を掲げたオバマ大統領は結局アメリカを変えることができなかつたように思われますが、彼の就任直後に出版されたこの本は「チェンジ」がありえないことを予言していました。「自由の国」アメリカには、自由を支えた2つの原罪があります。「インディアン」の土地略奪と虐殺、黒人の奴隷化と差別です。アメリカン・ドリームとは、他者の大きな犠牲の上に築かれた神話に他ならないと本書は主張しています。

【外国図-4 階開架 302.53||278】

■ ベラー, ロバート・N (1998) 『破られた契約 アメリカ宗教思想の伝統と試練』 未来社

アメリカは建国以来ずっと自らの歴史を西洋の古典や聖書になぞらえて理解してきました。例えば「インディアン」が暮らす土地を楽園かつ荒野と見る初期アメリカにおける両義的な視点は、聖書を背景にしたものです。プロテスタントに根ざしてはいますがそれを超えた複雑な宗教的伝統で常に問題になってきたのは、「回心」と「契約」の両立でした。「回心」は解放と自由を意味し、「契約」は解放後にもたらされる秩序を示します。しかし、アメリカの歴史において「契約」は結ばれるのとほとんど同時に破られています。合衆国憲法という最大の「契約」は、我々が世界を救済するのだというアメリカ特有の「選民思想」のもとに成立しました。「インディアン」の虐殺、黒人の奴隷化は、最大の「契約」である合衆国憲法の文言に反して行われました。「破られた契約」がいかにして糊塗あるいは批判されてきたのかを深く考察する、アメリカ人自身による充実した研究です。【総合図-A棟3階 学習用図書 361.5||BEL】

■ 西谷修 (2016) 『アメリカ 異形の制度空間』 講談社

上記の2冊の研究を受け、さらに一步踏み込んでアメリカを考察した書物。アメリカとは単なる地名や国名ではなく、「新世界」で新たに形成された〈自由〉の制度空間であることが論じられています。アメリカが提唱する〈自由〉は、ジョン・ロック的な「所有」の概念を持たない「インディアン」から土地を奪い、法的に「所有」することに端を発しています。世界を席卷するアメリカ的〈自由〉とは、あらゆるものの「私物化」でもあると本書は示唆しています。【外国図-4階開架 253||306】

V. 贈与の可能性

ここまでは、「西洋」や「アメリカ」が抱える問題点を考察する著作を紹介してきました。ここでは、「西洋」の問題点を克服することを目指して、「贈与」や「脱成長」について論じた2冊を紹介します。

■ モース, マルセル (2014) 『贈与論：他二篇』 森山工訳 岩波書店

商品経済とはまったく異なる、富の流通や分配が贈与を基礎とした「与える・受け取る・返す」という三重の義務によって成立つ社会関係があるということを明らかにした古典的論考。資本主義経済に替わる社会のあり方を考えるために大いに参考になります。【外国図-4階文庫 389||418】

■ ラトゥーシュ, セルジュ (2013) 『「脱成長」は、世界を変えられるか?：贈与・幸福・自律の新たな社会へ』 中野佳裕訳 作品社

いわゆる「先進国」は、どこも経済成長を目標に掲げています。しかし、この経済成長への盲目的欲望が今もたらしているのは、もはや人間のために経済があるのではなく、経済のために人間があるとさえ言える状態です。「エコノミー」の語源であるギリシャ語の「オイコノミア」が家政を意味していたことを考えると、現代世界における経済と人間の関係は恐ろしいほど倒錯しているように筆者には思われます。セルジュ・ラトゥーシュは、この狂気から抜け出すためのヴィジョンを描き出そうとしています。経済成長と決別するための「脱成長」の方策が本書では探求されています。この本は訳が良くないとウェブ上の書評でよく批判されています。ですが、筆者はそれほど問題を感じませんでした。時間をかけて丁寧に読めば得るものが多い書物ですので、ぜひ挑戦してみてください。【総合図-A棟3階 学習用図書 331.19||LAT】